

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第4回 第3章 メディアの力

がんサロンを開設するた。沢山の説明をした。記
際、告知のため飛び込んだ 者は真剣に私の話を聞いて
地元新聞社。学生時代、メ くれた。
ディア学を専攻した効果は その後、その記者に私の
こんなところから發揮出来 誠意が伝わった。相当な覚

新聞社記者を熱意で圧倒

医療

悟て来たことが読み取れた 百万円以上。それほど 価
よった。しつこく、真剣に 値があったのだろうか。私た
今後の展開を訴えていたよ ちの行動は……
うだった。
「その熱意に圧倒された 医療現場」が最初の接点だ
よ」と数年たったとき、当 が、それを超えた行動があ
時の記者が言っていた。 った。3位1体を超えた行
県下で「がんサロン」が 動は7位1体(患者、行政、
開設する度、県下を走り廻 医療、メディア、県議会、
ったことが記事となり、新 産業界、教育)となり、11
聞、映像の両方から追っか 位1体(建築学、宗教学、
けられた。嬉しい悲鳴だっ 人文学、終末期医療を追加)
た。厚労省から呼ばれたり と進化した。その後、行政
もした。 との連携の新しい関係を作
「島根県がん対策推進条 っていた。
例」が全国初で制定された 各紙の記者と友達になり
ときには全国紙は勿論のこと たい。そのためには何をし
と、全国の地方紙14紙に掲 たらいいのだろう。本音で
載されたらしい。これほど 話が出来なければ良い記事
大きな出来事だった。 は書けない。書いてももら
がん募金(バナナ募金) えない。
のときには記事の大きさは さらに仕掛けには話題性
見開き両面。広告にしたら も必要だ。犬が人を咬んで
どれほどなのだろうか?数 も記事にはならない。人間
が犬を咬んで初めて記事と ならば記事にはしてもらえな
なる。そんな発想をしなけ ない。
れば記事にはしてもらえな 医療現場)が最初の接点だ
い。 メディアは私たちの活動
を大きく後押ししてくれ
た。県議会はがん対策推進
条例作りに力を貸してく
れ、産業界はがん募金で私
たちの輪の中へ入ってき
た。今年9月をめぐりに条例
見直し案修正の準備に入っ
ている。教育分野は島根県
立大学出雲キャンパス看護
学科が中心となり、学生と
がんサロンとの連携は密に
なり、学生全員ががんサロ
ン見学へと進んでいった。
現在、私はとりにある
石見高等看護学院の3年生
を迎えてがんサロン見学と
講義を行っている。「がん
患者が望む看護師像」これ
が講義のテーマだ。